



Title	国際ワークショップを終えて
Author(s)	宇野田, 尚哉; 川口, 隆行; 崔, 範洵
Citation	グローバル日本研究クラスター報告書. 2018, 1, p. 45-48
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/68052
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

国際ワークショップを終えて

宇野田尚哉・川口隆行・崔範洵

1 開催に至るまで

本国際ワークショップを開催するに至った経緯について略述しておく、そもそもの発端は、宇野田が2015年10月に韓国日本語学会に招かれて「「戦後」の臨界と「文化運動」研究の現在」と題する講演を行ったことだった。この講演で広島『われらの詩』を含む50年代サークル文化運動の研究動向について話したところ、当時から学生を引率して広島を訪問する活動をしていた崔範洵が関心を持ってくれ、宇野田も在朝日本文学者小林勝を主題とする崔範洵の研究に関心を持った。

その後、2016年9月に崔範洵の招きで宇野田が嶺南大を訪れ、その際陝川で建設中の原爆資料館のことが話題にのぼり、大邱で国際ワークショップを開催して陝川を訪問するという案が生まれた。宇野田の招きで崔範洵が大阪大を訪れ、グローバル日本研究クラスター主催の国際ワークショップで「小林勝の小説における〈戦後〉の形象化—植民地体験・反戦運動体験とその記憶—」と題する報告を行ったのは同年12月のことで、このときには川口隆行がディスカッサントをつとめ、翌日には崔範洵も神戸で開催された原爆文学研究会に参加し、研究会終了後の相談で、大邱で国際ワークショップを開催して陝川を訪問するというプランが再浮上した。

その後それぞれの事情でプランを具体化できずにいたが、6月に崔範洵から宇野田・川口に呼びかけがあったのに呼応して急速に準備が進み、無事に開催にこぎつけることができた。今回の大邱での国際ワークショップと陝川へのスタディ・ツアーを可能にしたのは、嶺南大学校人文学事業団東アジア平和学チームの尽力と、原爆文学研究会からの積極的参加にほかならない。

国際シンポジウムの類は、大学の周年行事としてやらざるをえないからとか、たまたま研究資金を獲得できたからとか、そんな理由で開催されることが多い。そんな理由で開催された国際イベントにおいては、研究者は、呼び集められ、そして帰っていくだけで、実質的な研究交流がなされることは少ない。ここに開催に至るまでの経緯をやや詳しく記したのは、本国際ワークショップの場合は実質的な研究交流から積み上げるかたちで開催されたことを強調するためである。

短い期間ではありながらも実質的に積み重ねられてきた研究交流の成果を、いったんこ

のようなかたちでまとめたうえで、次にどうするのが問われてくることになるだろう。それぞれの持ち場に持ち帰って熟成させるのか、あえて対話の場を設け続けるのか。熟慮することとしたい。

(宇野田尚哉)

2 成果と課題

原爆投下といえば日本の植民地支配からの解放という意識が根強い韓国社会において、「原爆文学」というジャンルの存在など認識の埒外とはいわないにせよ、あまり関心＝利害が向けられる対象ではないのかもしれない。そうした現状において、文学（日本文学、韓国文学）、歴史、思想史等の多彩な専門を背景とする研究者が、「原爆文学」をめぐる議論を交わす場を韓国で設定しえたことこそ、今回の国際ワークショップの最大の成果と言ってもよい。

もう少し具体的に言うならば、「原爆文学」というジャンル（制度）の歴史的成立過程で抱えこんださまざまな問題を越境や交渉という作業を通して再考する貴重な機会となったように思う。ワークショップの議論はきわめて文学的であると同時に、73年前におきた原爆投下という出来事に韓国はもとより日本の人々が社会的にどう関わってきたのか、という大きな問題をあらためて考えさせるものでもあった

また、2000年代以降盛んになった冷戦研究を背景に、東アジアという枠組を設定し、台湾や沖縄の個別事例を話題にできたのも議論に広がりを持たせることにつながった。ワークショップの趣旨説明において崔は、東アジアと「原爆文学」というテーマ設定について、「東アジア内部の非均質性や断絶を省察する契機」とする可能性に触れたが、報告者やコメンテーターの発言はもとより、フロアを含めた全体討議を活発にすすめる過程においてこうした可能性の一端が垣間見られたように思う。

ただし、コメンテーターやフロアからの質疑でもあったように、東アジアという枠組の内実について、ワークショップ参加者はもとより報告者やコメンテーターにも認識の開きがあったのは事実である。簡単に言ってしまうと、分かったような、分からないような曖昧で便利な言葉として、「東アジア」を使ってしまった側面がないわけではない。少なくとも企画者の私たちをふくめて報告者、コメンテーターのあいだでは、一定の共通理解の構築、問題の所在の把握が事前に必要だったと反省している。また、日本と韓国、さらに台湾、沖縄と、冷戦体制成立以後の国民国家や地域をそれぞれ代表するかのような報告者やコメンテーターの役回りについても、もう少し工夫が必要であったかもしれない。さらにいえば、「東アジア」とタイトルに掲げながら、核兵器保有国でもあり原発大国でもある中国と絡む文脈をまったく構成できなかったという点は、北朝鮮と絡む文脈を十分に構成できなかったという点以上に、深刻な欠落であるだろう。「東アジアから原爆文学を読みなおす」という問題設定の可能性が、ここでは厳しく問われているといえよう。

今回の国際ワークショップは、「原爆文学」という言葉をあえて掲げることで、こうした文学ジャンルが存在する日本／不在の韓国（あるいは台湾）といった構図を一度は可視化させ、そこに対話や議論のきっかけを見出そうとした。だが、「原爆文学」というジャンルは不在でもそれぞれの国や地域に、原爆や核、さらには原発をめぐる言説や表象はさまざまに存在している。冷戦研究を背景とした東アジアというテーマを考えた場合、こうした観点からも今後議論を深める必要があるのではなかろうか。（川口隆行）

3 陝川訪問の意義

2017年9月30日の陝川訪問は、前日に開かれた国際ワークショップに続く重要な日程であった。厳密に言えば、「〈原爆文学〉を東アジアの観点から読みなおす」という国際ワークショップの主題と日程は、8月6日に韓国の陝川に原爆資料館が開館するということ念頭においたものであった。今回の国際ワークショップは、陝川の原爆資料館の開館と原爆文学研究会の方々の深い関心があったから開催できたのである。

ところで、陝川の原爆資料館に対しては、韓国社会より日本社会のほうがはるかに大きな関心を寄せている。今回のワークショップを準備した筆者が資料館開館のニュースをはじめ聞いたのも広島においてであったし、具体的な準備状況と開館日程を知らせてくれたのも反核・脱原発運動にたずさわっている大邱の日本人であった。9月30日の訪問に先だって8月17日にも資料館を訪問したが、それも10名の広島の平和教育研究所の方々が訪ねて来られたからである。その時NHKはすでにドキュメンタリー制作のための長期撮影を進めていた。このような経験をもとに、筆者は8月26日に韓国原爆被害者協会の陝川支部長である沈鎮泰シムジンテさんと韓国原爆被害者協会の事務局長である韓正順ハンジョンスンさんをお招きして、大邱の市民に韓国人被爆者の状況を知らせるための催しを開いたが、参加者は思ったより少なかった。また、今回の国際ワークショップを大邱地域の新聞社や放送局に知らせたものの、取材に訪れたメディアはなかった。このような個人的な経験は、韓国社会の原爆被害者への関心不足や原爆文学の不在とも相通じていると思われる。

ワークショップの報告で金文柱さんも述べたように、韓国人原爆被害者の存在が広く知られるようになったのは、故金享律キムヒョンニョル（1970-2005）さんが2002年3月22日に大邱で記者会見を開いたあとのことである（金享律さんは、この記者会見で自身が被爆二世であることをおおよけにしたのち、「韓国原爆二世患友会」を結成し、二世の立場から「韓国原子爆弾被害者と原子爆弾二世患友の真相究明及び人権と名誉回復のための特別法」の制定に取り組むなか、2005年に亡くなった）。1970年代と1990年に韓国政府の実態調査があったが、それは中身の無いものに止まった。長いあいだ韓国社会は、韓国人被爆者の存在すらも知らないままであったのである。金享律さんの記者会見のあと、2003年には市場淳子さんの『韓国の広島』（『ヒロシマを持ち帰った人々』の韓国語版。書誌については宇野田報告参照）が出版され、また2008年には34

歳で亡くなった金享律さんの評伝が出版されるなかで（전진성『원폭 2 세환우 김형률 평전 : 삶은 계속되어야 한다』, 휴머니스트, 2008 年），韓国社会でも原爆被害者への関心が少しずつ広がった。しかし，社会全体でいうと，まだ少数の関心である。1945 年当時の朝鮮人被爆者が約七万人と推算され，その被爆の苦痛がいまも二世・三世まで続いていることを考えると，より多くの関心と行動，そして制度的支援が切実な状況である。国際ワークショップにつづく陝川訪問は，日韓の研究者同士がこのような状況への関心と行動をともにしていくきっかけを作ったところに最も大きな意義がある。

陝川の資料館を訪問して感じたのは，展示のあり方の面でも，関係資料の収集・整理の面でも，今後継続的な取り組みが必要であろうということである。資料館が開館に至ったのは大きな一歩であるが，展示のあり方については不断の再吟味が必要であろう。（今回は時間的な制約が大きく日本からの参加者とこの点について十分な意見交換をすることができなかったのは残念であった）。また，関係資料の収集・整理も，沈支部長個人の尽力に依存している部分が大きいようであり，その研究も含めて，一刻も早い対応が必要であろう。さらに，陝川訪問のバスに同乗して，韓国人被爆者二世・三世の状況を説明してくれた韓事務局長の言葉は，韓国社会が，そして地域の大学が果たさねばならない役割を考えさせてくれた。今後は，関心だけにとどめず，教育と研究につなげていきたいと考えている。（崔範洵）